

ヨーロッパの国ぐににおける宗教意識の変容*

——「国際比較調査」のデータ分析——

Wolfgang JAGODZINSKI**

真 鍋 一 史***

I. はじめに——研究の目的——

本研究の問題関心は、グローバリゼーションが急速に進展する現代社会の視座から、「宗教のゆくえを探る」というところにある。このような問題関心を、ここでは、ヨーロッパの国ぐににおける「宗教意識 (religious consciousness) の変容」というテーマに焦点を合わせて、実証的に掘り下げていく。具体的にいうならば、研究は、以下のような手順で進めていくことにする。

1. ヨーロッパの国ぐににおいて、人びとの宗教意識が大きく変化しつつあるといわれるようになって、すでに久しい。ここでは、これまでの欧米の宗教社会学における理論的研究から、「宗教意識の変容」をめぐる諸命題を抽出し、それらを7つの仮説にまとめる。

2. これらの諸仮説を、「質問紙法にもとづく大規模な国際比較調査 (large scale cross-national comparative questionnaire surveys)」のデータ分析をとおして、実証的にテストする。そのために、「ヨーロッパ価値観調査 (European Values Study: 1999)」「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme: 1998)」「宗教と道徳の多元主義調査 (Religious and Moral Pluralism: 1999)」のデータ・セットを利用する。

II. 宗教意識の変容をめぐる諸仮説

これまでのヨーロッパの宗教社会学における理論的研究から、「宗教意識の変容」をめぐる諸命題を抽出し、それらを以下の7つの仮説にまとめた。

〈仮説 1〉

「天国」や「地獄」といったシンボルが、社会の近代化とともに、その「象徴的な力」を失ってきた。このことは、つぎの2つの側面から考えることができる。

①「天国」という用語では、「昇天」の場合と同様に、「天」、つまり「空」が観想される。

かつて、「天」、つまり「空」は、遠くに見はるかすものであった。ところが、科学技術の発達とともに、それが手の届くものとなってきた。そのため、それが「超越的世界 (transcendent world)」あるいは「もう1つの世界: 来世 (the other world)」をイメージするための手がかりにはなりにくくなってきた。

②「天国」や「地獄」は、いうまでもなく「最後の審判 (the Last Judgment)」のもたらす結果であるが、人びとはもはやそのような「審判」という考え方、とくに「地獄」という形で示される罰の「宣告 (condemnation)」という考え方を受け入れなくなっている。

*キーワード: 宗教意識、変容、国際比較調査、宗教的シンボル、教義の解釈、「生まれ変わり」、スピリチュアリティ

**ドイツ・ケルン大学教授

***関西学院大学名誉教授、青山学院大学総合文化政策学部教授

〈仮説 2〉

キリスト教のような一神教においては、その最も重要なシンボルは「神のイメージ」である。それが、つぎの2つの方向に変化しつつある。

①伝統的なキリスト教の世界においては、「神」は、芸術家によってあごひげを生やした男性として描かれてきた。それが、「力強さ」を表現するものであったからにはほかならない。しかし、このようなイメージは、もはや人びとに受け入れられるものではなくなってきた。そして、「神」という概念さえも用いられなくなりつつある。

②他方において、相変わらず「神」という概念を用いる人びともいる。しかし、その場合も、それは、上述のような「力強い男性像」として具体的に表現されるものではなく、たとえば「命の力 (life force)」あるいは「精神的なもの (spirit)」として抽象的に観念されるものになってきた。

〈仮説 3〉

キリスト教における最も重要なテキストである聖書の理解の仕方に変化がでてきた。かつてはイエス・キリストは「人にして神」として理解され、「三位一体」がその教義・教理 (dogma・doctrine) の中心に位置づけられてきたが、いまでは新約聖書は「愛と希望のメッセージ (a message of love and hope)」として理解されるようになってきた。

〈仮説 4〉

「死後の世界 (life after death)」や「来世 (the other world)」という考え方は凋落の方向にある。このような傾向については、つぎの点が指摘できる。それは、人びとは、目で見て感じることのできる世界を超えた「リアリティ」といったものを感じ取る心を失ってしまったわけではない。しかし、人びとは、「この世的なカテゴリー (this-worldly categories)」を用いて、そのような「超越的なリアリティ (a transcendent reality)」に接近することはできない、と考えるようになってきているということである。

〈仮説 5〉

グローバル化の進展にともなって、

「欧米のキリスト教」と「アジアの宗教、とくに仏教」に類似点がでてきている。キリスト教徒が、「生まれ変わり (reincarnation)」というアジア的な考え方——いうまでもなく、キリスト教では「Resurrection (復活)」——を、少なくとも見かけ上は、受け入れるようになってきている。

〈仮説 6〉

伝統的な「宗教性 (religiosity)」に替わって、「スピリチュアリティ (spirituality)」という考え方が、とくに若い世代を中心に広がってきている。しかし、その意味するところは、それぞれの社会・文化・人によって、必ずしも同じものであるとはかぎらない。

〈仮説 7〉

現代のグローバル化の波のなかにあつて、ヨーロッパの人びとのものの見方・考え方・感じ方には、いわゆる「宗教的な寛容性 (religious tolerance)」の兆しが見られるようになってきた。しかし、それは、ただちに世界規模における宗教的な「対立 (conflict)」や「暴力 (violence)」の減少を意味するものではない。

III. 諸仮説の実証的なテスト

1. データ分析の進め方

諸仮説の実証的なテスト——「確認 (confirmation)」あるいは「検証 (verification)」——は、「質問紙法による多数の国ぐにを対象とする大規模な国際比較調査 (large scale multinational comparative questionnaire surveys)」のデータ分析という形でなされる。データ分析のために、どのような国際比較調査を取りあげるかについては、すでに述べた。したがって、ここではデータ分析の具体的な進め方について説明する。

A) 世代の効果 (generation effect)

宗教意識の変容に関する諸仮説は、いわゆる「横断的調査 (cross-sectional survey)」のデータをもってしては、実証的にテストすることは困難である。ここでは、世代間の比較をとおして、宗教意識の変容を示唆する証拠の提示を試みるにすぎ

ない。

方法論的にいえば、「横断的調査」においては、「世代効果」と「加齢効果」を区別することは不可能である。「世代効果」のように見えるものが、じつは「加齢、つまりライフ・サイクル効果 (life cycle effect)」によるものであるかもしれないのである。しかし、「ヨーロッパにおける宗教意識の変容」というテーマについては、すでに「縦断的調査 (longitudinal survey)」にもとづく実証的な研究の蓄積がある。その1つが、宗教意識に見られる「年齢差」は、「世代効果」によるものが大きいという知見である。つまり、ヨーロッパにおいては、「ライフ・サイクル効果」はほとんど見られないということである。こうして、ここで「世代間に見られる宗教意識の違い」を宗教意識の時系列的な変容の証拠とすることには、十分な根拠がある。

では、このような「世代間に見られる宗教意識の違い」を、どのように確認していくかという点、ここでは分析を簡便化するために、つぎのような方法をとる。それは、世代を2つのグループに分けるということである。

- ①第二次世界大戦後に生まれた「戦後世代」
- ②第二次世界大戦前（戦中も含めて）に生まれた「戦前世代」

このような世代区分の仕方については、欧米の宗教社会学においては、その有効性を確認した多くの実証的な研究がある。

B) 社会的環境の効果 (context effects)

宗教意識の変容は、「世代」による変化を反映するだけではない。それは、それぞれの調査対象国の「社会的環境」の違いをも反映する。ここでは、そのような「社会的環境」として、調査対象国を「伝統的な宗教性のレベルの高い国 (宗教的な国: religious countries)」と「伝統的な宗教性のレベルの低い国 (世俗的な国: secular countries)」に区別した (その基準についても、欧米の宗教社会学の先行研究を参照した)。

(a) RAMP の場合

- 「宗教的な国」: ポーランド、イタリア、ポルトガルの3か国
- 「世俗的な国」: デンマーク、フィンランド、ノ

ルウェー、スウェーデン、ベルギー、オランダ、イギリス、ハンガリーの8か国

(b) EVS の場合

EVS には「神の重要性」を尋ねる質問項目が含まれている。この質問項目では、「1. まったく重要でない」から「10. とても重要である」の10点尺度が用いられている。そこで、それぞれの国ごとの「平均値」を計算し、それが5.6以上の国は「宗教的な国」、5.6未満の国は「世俗的な国」と分類した。その結果、前者が19、後者が15の国となった。

以上のA)とB)の2つの基準を組み合わせることで、調査回答者は4つのグループに分類される。

- ①「宗教的な国」における「戦前世代」
- ②「宗教的な国」における「戦後世代」
- ③「世俗的な国」における「戦前世代」
- ④「世俗的な国」における「戦後世代」

こうして、ここでのデータ分析では、これら4つのグループごとに、それぞれの質問内容に対する回答の結果を検討する。

2. データ分析の結果

(1) 宗教的シンボルの象徴的な力の衰退

EVS (1999) では、「天国」「地獄」「死後の世界」「神」の存在を信じているかどうかを尋ねる質問がなされている。図1は、その回答結果を%で示している。ここでは、「欠損値 (「わからない」「無回答」など)」は計算から除いている。図1から、以下の点を読み取ることができる。

①左端から3つの回答者グループにおいては、「信じる」という回答の%が最も低いのは「地獄」で、つぎが「天国」、そして「死後の世界」、最後に「神」という順位での回答の%の増加が見られる。ただし、右端の「宗教的な国」での「戦前の世代」では、「天国」と「死後の世界」の%がほぼ同じレベルという結果になっている。

②「戦前世代」と「戦後世代」をくらべるならば、「宗教的な国」の場合も、「世俗的な国」の場合も、いずれの場合も、「戦後世代」の方で、「信じている」という回答の%が低い。

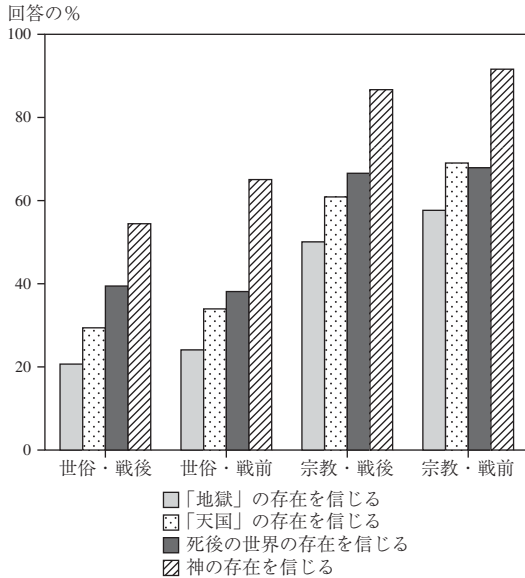


図1 4つのグループごとの「信じる」という回答の% (EVS 1999)

③しかし、このような「戦前世代」と「戦後世代」との差違の大きさを、「宗教的な国」と「世俗的な国」との差違の大きさとくらべてみるならば、それが前者よりも後者的の方で大きいことがわかる。このことから、調査回答者の社会的環境は、それがいわゆる「同調への圧力 (conformity pressure)」として作用することをおして、それぞれの回答傾向に大きな影響を与えていると考えられるのである。

以上から、ここでのデータ分析の結果は、〈仮説1と4〉を支持するものとなっているといえよう。

(2) 神のイメージの変化

図1では、「世俗的な国」の「戦後世代」においてさえ、50%を超える人びとが神の存在を「信じている」と答えていることが示されている。しかし、この質問項目の問題点は、その回答において、人びとが同じ「神」を考えていたかどうかは「わからない」という点にある。このような問題点に採りを入れるために、EVS (1999) の「神のイメージ」に関する質問項目が利用できる。ここでは、回答者は、①「人格神」、②「スピリット」あるいは「命の力」、③わからない、④「人格神も「命の力」も信じない、の4つの選択肢

から、それぞれの「神のイメージ」を選ぶという形式がとられている。図2から、以下のような点を読み取ることができる。

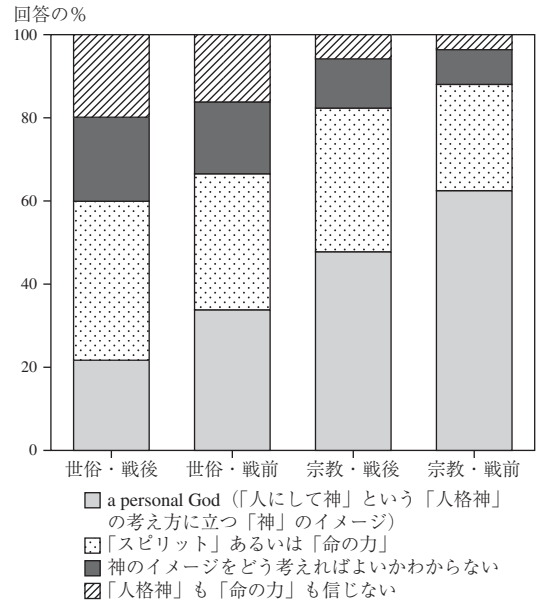


図2 神のイメージ (EVS 1999)

①図2の「帯グラフ」を右から左へと見ていく——これは歴史的な時間の流れに対応する形となっている——ならば、「人格神 (a personal God)」という選択肢を選んだ回答者の%が、一番右の「宗教的な国」の「戦前世代」では60%強であるのに対して、一番左の「世俗的な国」の「戦後世代」では約20%にまで減少していることがわかる。

②つぎに、これとは逆に、「スピリットあるいは命の力」という回答は、約25%から40%近くまで増加している。

③「人格神も命の力も信じない」という回答についても同じ傾向が示されており、それは約5%から約20%へと増加している。しかし、「伝統的な神のイメージ」も、「現代的な神のイメージ」も、いずれをも否定する回答者が約20%にとどまっていることは注目される。

④「わからない」という回答も、同じように増加している。

以上から、ここでの諸知見は、〈仮説2〉を支持するものとなっていることがわかる。

(3) 聖書の教義・教理の解釈の変化——イエス・キリストは「人にして神」か?——

キリスト教の教義・教理に従えば、イエス・キリストは「人にして神」である。RAMP では、このようなキリスト教の中心的な教義・教理についての人びとの考え方を捉える試みがなされている。それは、「イエス・キリストは人にして神である」というステートメントを提示し、それに対して、回答者は左端の「まったくそうでない」から、右端の「まったくそうである」までの7点尺度で回答するというものである。図3では、4つのグループごとに、回答のパターンが示されている。図3から、つぎのような諸知見を読み取ることができる。

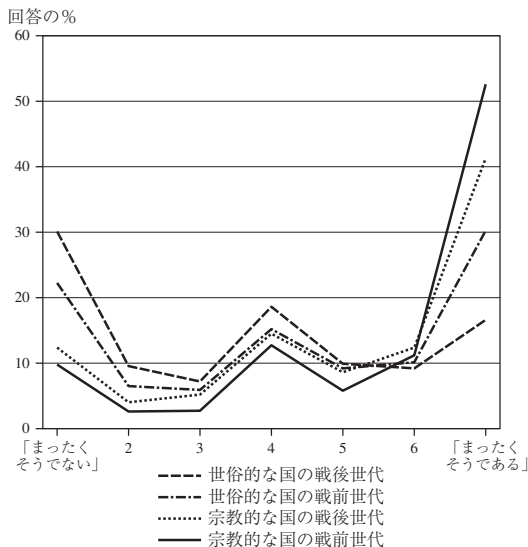


図3 イエス・キリストは「人にして神」か? (RAMP 1999)

①どのグループも、いわゆる W 字型の回答パターンを示している。それは、7点尺度において、「1. まったくそうでない」「4. どちらともいえない」「7. まったくそうである」の3つの点での回答者の%が高く、2、3、5、6の4つの点での回答者の%が低いというものである。

②しかし、同じく W 字型の回答パターンを示しながらも、それぞれのグループごとにその W の形に差違が見られる。それは、「宗教的な国の戦前世代」と「世俗的な国の戦後世代」の2つの典型的なグループの回答パターンをくらべるこ

で明らかとなる。つまり、右端の「まったくそうである」という回答では、「宗教的な国の戦前世代」の%が高く、「世俗的な国の戦後世代」の%が低い。そして、左端の「まったくそうでない」と真中の「わからない」という回答では、逆に、「宗教的な国の戦前世代」の%が低く、「世俗的な国の戦後世代」の%が高い。

以上の結果から〈仮説3〉はデータによって確認されたといえよう。

(4) 「復活」から「生まれ変わり」へ

本来、「生まれ変わり」という考え方は、アジア的宗教のものである。キリスト教においては、そのような考え方に対応するものとして「復活(resurrection)」がある。両者の区別を明確にするために、EVS (1999) では「わたしたちは、いったん肉体が死滅した後も、何度もこの世に生まれ変わる」というステートメントが考案された。このようなステートメントに対して、「そう思う」と回答した人の%が図4に報告されている。ここから、つぎのような諸知見を読み取ることができる。

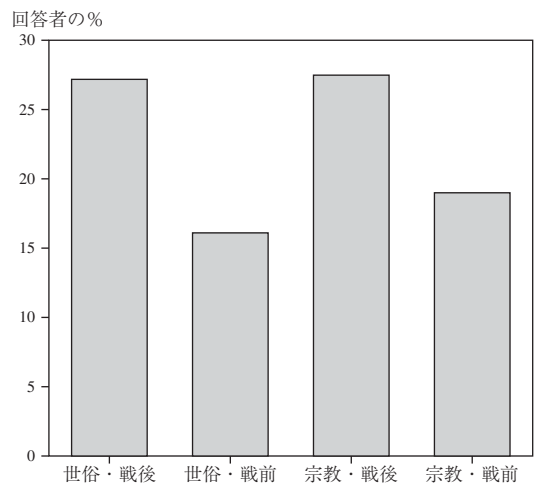


図4 生まれ変わりを信じるか?——信じるという回答者の%—— (EVS 1999)

①「宗教的な国」においても、「世俗的な国」においても、「生まれ代わり」を信じている人の%は、戦前世代にくらべて、戦後世代の方で高い。具体的にいうならば、それは前者で15%から20%の間であるのに対して、後方で25%から

30%の間となっている。

②「生まれ変わり」という考え方は、戦後世代においては、すでに1/4以上の回答者によって受け入れられている。

③ここでは、回答者の「社会的環境」が「宗教的な国」であるか、それとも「世俗的な国」であるかは、ほとんど無関係であることがわかる。では、なぜそうなのであろうか。「生まれ変わり」という考え方は、すでに「宗教的な国」においても、「世俗的な国」の場合と同じように浸透してきているのであろうか。

以上から、ここでの諸知見は〈仮説5〉を確認するものとなっているといえる。

(5) 「宗教性」から「スピリチュアリティ」へ

「新宗教 (new religion)」への態度や志向性は、従来からの「宗教性の自己評定尺度 (religious self-assessment scale)」では測定することが困難であるとされてきた。そこで、RAMP では、つぎのような質問項目で、それを捉える試みがなされた。

「あなたは自分が宗教的な人間であるかと思うかどうかは別にして、『スピリチュアル』な生活を送っていると思いますか。それは、単に『知的な生活』あるいは『感性豊かな生活』ということではなく、それをさらに超えた生活ということです (1. まったくそうでない,, 7. まったくそうである)。」

ここでは、このような測定尺度によって捉えられる「スピリチュアリティ」について、つぎの2つの角度からの検討を試みる。

A) このような「スピリチュアリティ」への志向性は、仮説からするならば、若年層において高いはずである。そこで、「スピリチュアリティ」および「宗教性」のレベルと「年齢」との関係について検討する。

因みに、RAMP における「宗教性」を捉える質問項目は、つぎのようなものである。

あなたは、教会あるいは礼拝所に行っているかどうかは別にして、自分がどの程度宗教的な人間であると思いますか (1. まったく宗教的でない,, 7. とても宗教的である)。

ここで、「スピリチュアリティのレベル」と「年齢」との関係、および「宗教性のレベル」と「年齢」との関係、をそれぞれ具体的にどのように検討するかであるが、この点については、つぎのような方法をとる。

1) 「スピリチュアリティのレベル」と「宗教性のレベル」については、それぞれの選択肢の番号をその「値」として、年齢層ごとの「平均値」を計算し、それをグラフにプロットし、それぞれの点を結んで「折れ線グラフ」を描く。

2) 年齢層は、16-24 歳、25-34 歳、35-44 歳、45-54 歳、55-64 歳、65 歳以上の 6 段階に分ける。

結果を示した図 5 a から、つぎのような諸知見を読み取ることができる。

宗教性／スピリチュアリティのレベル (平均値)

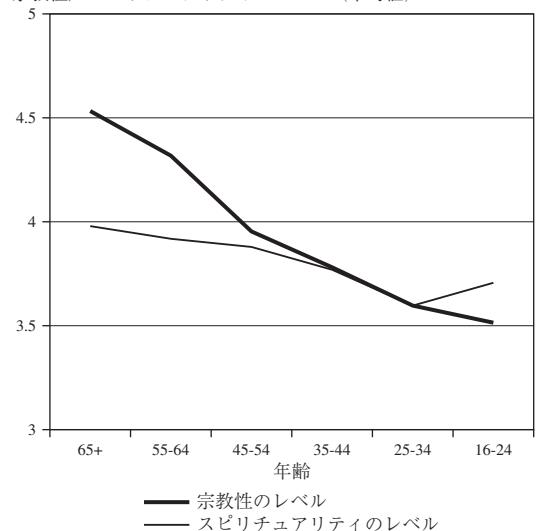


図 5 a 年齢層ごとの「宗教性のレベル」と「スピリチュアリティのレベル」——平均値による比較

①「宗教性」の平均値も、「スピリチュアリティ」の平均値も、年齢が高くなるにつれて高くなっている。

②「55 歳以上」のところでは、「宗教性」の平均値が「スピリチュアリティ」のそれよりも高い

レベルにあり、逆に 16-24 歳のところでは、「スピリチュアリティ」の平均値が「宗教性」のそれよりも高いレベルにある。

以上から、仮説 6 のとおり、「スピリチュアリティのレベル」は若い世代において高いものとなっていることが確認された。

B) 「スピリチュアリティ」が新しい「宗教性」の形態の 1 つであるとするならば、それは、すでに検討した「生まれ変わり」という考え方とは正(プラス)の相関を示すはずである。図 5b では、横軸に「スピリチュアルな生活を送っているかどうか」を、そして縦軸に「生まれ変わりを信じるかどうか」を置き、前者のカテゴリごとに後者の平均値をプロットすることで、両者の関係を「折れ線グラフ」の形で示している。

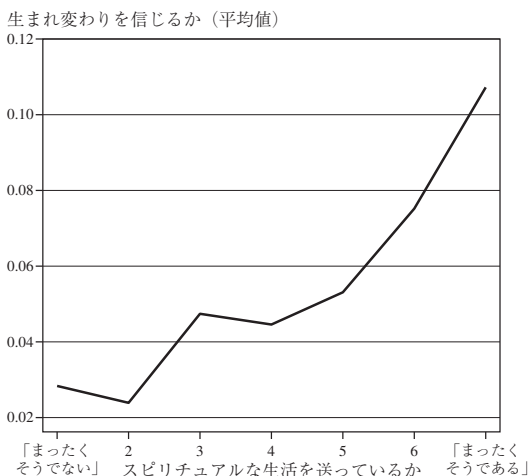


図 5b 「スピリチュアルな生活を送っているか」と「生まれ変わりを信じるか」との関係 (RAMP 1999)

図 5b から、仮説どおり「スピリチュアリティ」のレベルが高くなるにつれて、「生まれ変わりを信じるレベルも高くなるというかなり強い関係性が確認された。

(6) 宗教的な寛容の増大

近代化は、世界のあらゆるところで宗教的な寛容の進展をもたらすわけではないであろう。しかし、少なくともこれまでに見てきたような宗教意識の変容が起きている国や社会にあっては、宗教

的な寛容の出現が予測される。

ISSP (1998) には、このような「宗教的な寛容」を捉えようとする質問項目が含まれている。それは、つぎのようなものである。

あなたは、宗教についてどう思いますか。あなたのお考えに最も近い番号に 1 つだけ○をつけてください。

1. どの宗教にも真実などない
2. どの宗教にも真実はある
3. 真実は 1 つの宗教だけにある

いうまでもなく、1 は「宗教否定の考え方」、2 は「宗教的な寛容の考え方」、3 は「伝統的な宗教の考え方」、ということができる。

ここでは、それぞれの選択肢を選んだ回答者の % の値をつないだ「折れ線グラフ」を作成したが、そのようなグラフからの知見の読み取りは、それぞれの国を、その回答パターンの特徴によって、いくつかのグループにまとめるという形で行なった。

A) アメリカ合衆国

アメリカ合衆国のパターンからは、つぎのような傾向が読み取れる。

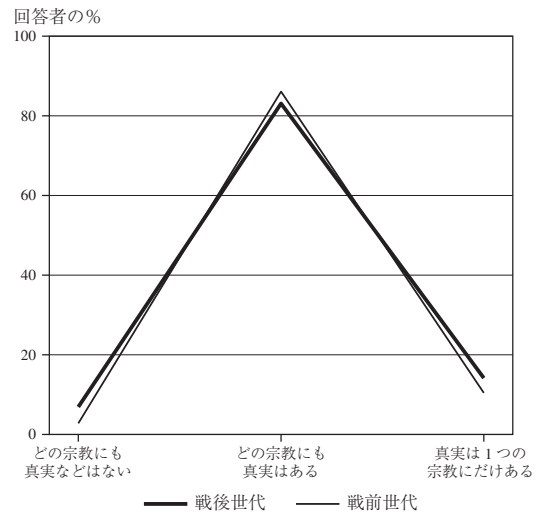


図 6a アメリカ合衆国における宗教についての考え方

①回答パターンが典型的なピラミッド型となっており、回答者の圧倒的多数が「どの宗教にも真

実がある」という宗教に対する寛容な選択肢を選んでいる。

②「戦前世代」と「戦後世代」の回答のパターンには、ほとんど差が見られない。

③残りの2つの選択肢をくらべるならば、「真実は1つの宗教だけにある」の%が、「どの宗教にも真実などない」のそれよりも、いくらか(10%程度)高くなっている。

B) イギリス・フランス・日本

ここで、日本は、ヨーロッパの国ぐにとの比較の目的で取りあげた。これら3か国においては、回答パターンはピラミッド型を示しているものの、「戦前世代のパターン」と「戦後世代のパターン」との間に若干の差が見られるところがアメリカ合衆国との相違点である。その差違は、つぎの点が主要なものといえよう。

①「どの宗教にも真実がある」という回答は、「戦後世代」よりも「戦前世代」でわずかに高い。

②「どの宗教にも真実などない」という回答は、「戦前世代」よりも「戦後世代」でわずかに高い。

③日本場合は、「どの宗教にも真実などない」という回答が「戦後世代」で40%近くにまで達しており、そのため「どの宗教にも真実がある」の%が低くなるという結果をまねいている。そうだとするならば、少なくとも日本の場合、「宗教

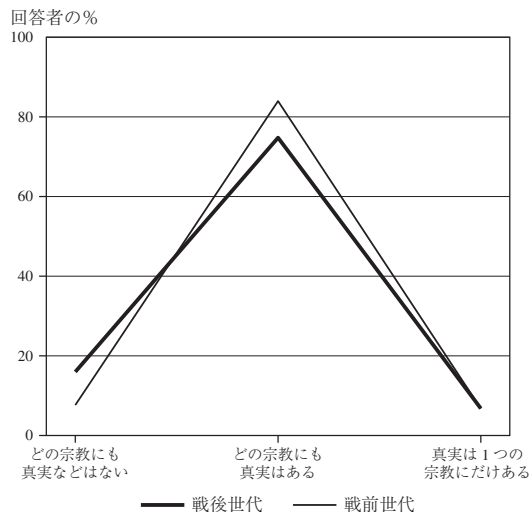


図6b イギリスにおける宗教についての考え方

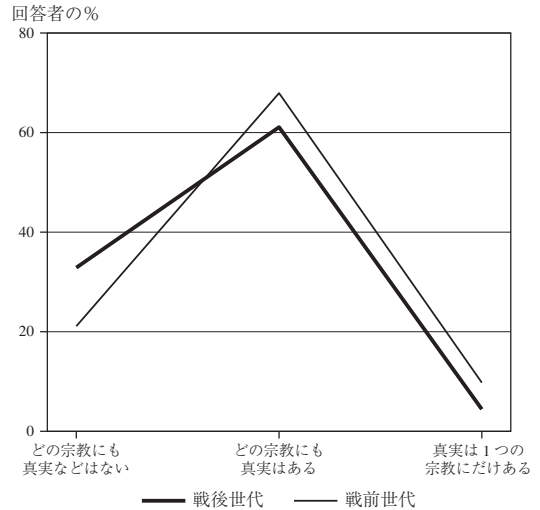


図6c フランスにおける宗教についての考え方

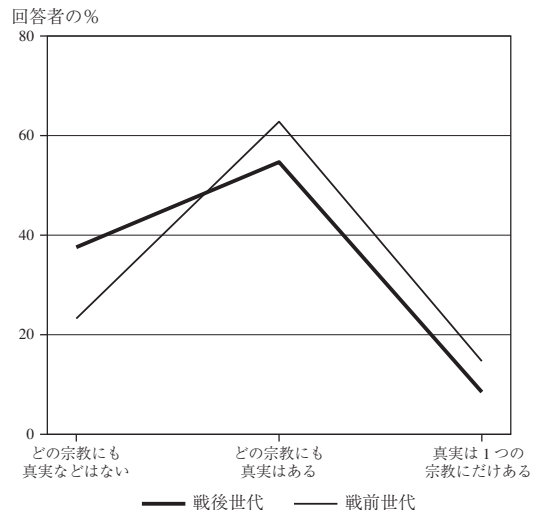


図6d 日本における宗教についての考え方

的な寛容」の指標としての、この回答のカテゴリの有効性には、問題があるといわなければならないかもしれない。

C) 東ドイツ・スロベニア

「どの宗教にも真実などない」の%がほぼ30%とかなり高く、この点でB)のパターンとの類似点が見られるが、B)のパターンとの相違点は、つぎの2点にある。

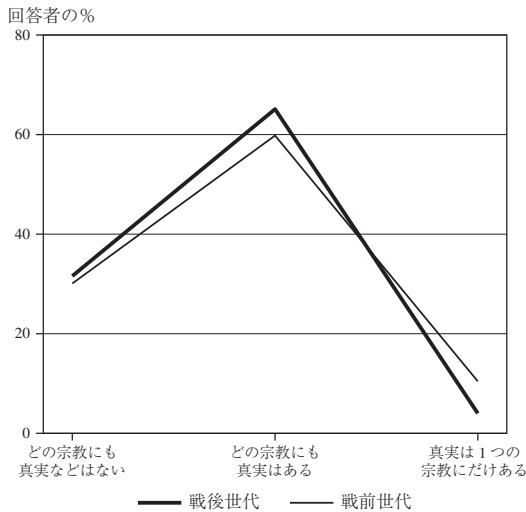


図 6e 東ドイツにおける宗教についての考え方

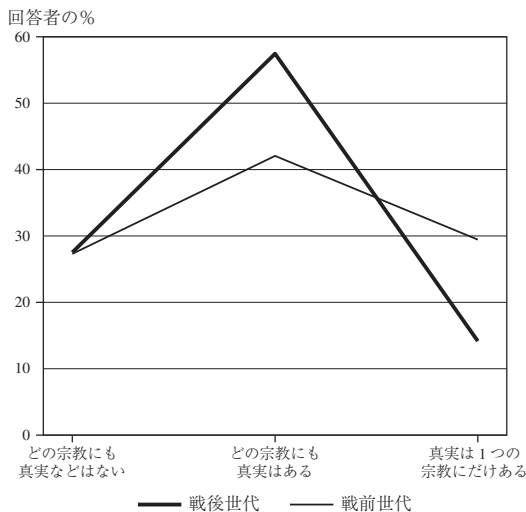


図 6f スロベニアにおける宗教についての考え方

①B) のパターンでは、「どの宗教にも真実などない」が「戦前世代」にくらべて「戦後世代」で多いが、C) のパターンではこのカテゴリについては「戦前世代」と「戦後世代」に差が見られない。

②B) のパターンでは、「どの宗教にも真実がある」という回答が「戦後世代」よりも「戦前世代」で多いが、C) のパターンでは、それが逆に「戦前世代」よりも「戦後世代」が多い。

D) スロバキア

これまでの回答パターンは、それぞれの国ごと

にバリエーションはあるものの、その全体的な形は「ピラミッド型」という表現が可能なのであった。ところが、スロバキアは「左肩上がり（右肩下がり）」の直線のパターンを描いている。つまり、「どの宗教にも真実などない」という回答が「戦前世代」の40数%、「戦後世代」の50数%を占めるまでとなっているところに特徴がある。

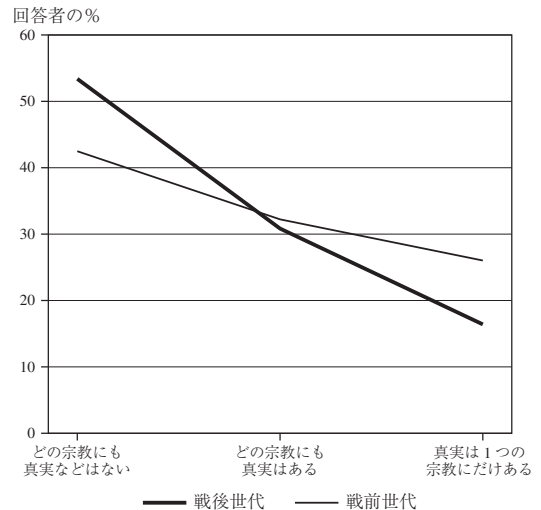


図 6g スロバキアにおける宗教についての考え方

E) ポーランド・イスラエル（ユダヤ人とアラブ人の両方を含む）

ここでの回答パターンは、ピラミッド型分布の両裾のところの%の高さという点で、フランス・日本・東ドイツ・スロベニアとは対照的な形となっている。後者では、分布は左端の裾（「どの宗教にも真実などない」）のところ、右端の裾（「真実は1つの宗教にだけある」）のところよりも高い形となっているのに対して、前者では、それが逆の形となっている。つまり、ポーランドとイスラエルの場合は、「真実は1つの宗教にだけある」という回答の%が、「どの宗教にも真実がある」のそれにかかなり接近するまでとなっている。そしてポーランドとイスラエルの違いは、そのような「真実は1つの宗教にだけある」という回答の%が、前者では「戦前世代」の方が高く、後者では「戦後世代」の方が高いところにある。

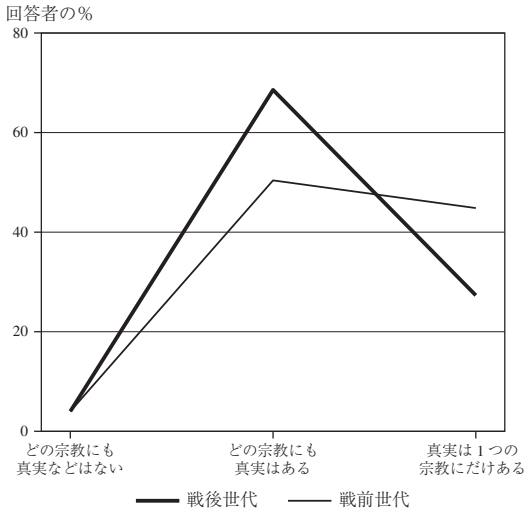


図 6h ポーランドにおける宗教についての考え方

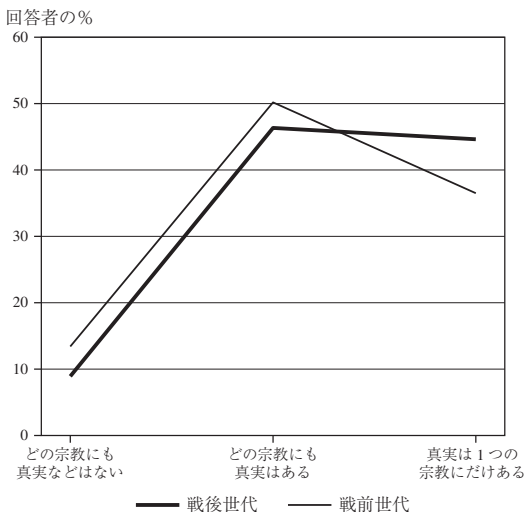


図 6i イスラエルにおける宗教についての考え方

F) フィリピン

最後に、ヨーロッパの国ぐにとの比較の目的で分析に取りあげたフィリピンのパターンは、「折れ線グラフ」の傾きの方向という点で、先にあげたスロバキアのパターンとは対照的な形となっている。つまり、スロバキアのパターンが左肩上がりの直線の形であったのに対して、フィリピンのそれは右肩上がりの直線の形となっている。つまり、このパターンでは、回答者の圧倒的多数が、「真実は1つの宗教にだけある」と答えているのである。フィリピンはきわめて「伝統的な宗教」の強い国ということができる。

こうして、「日本」ばかりでなく、スロバキアやフィリピンのような国においても「どの宗教にも真実がある」という回答の選択肢は、「宗教的な寛容」の傾向を捉える指標としては、必ずしも適切なものであるとはいえないかもしれない。

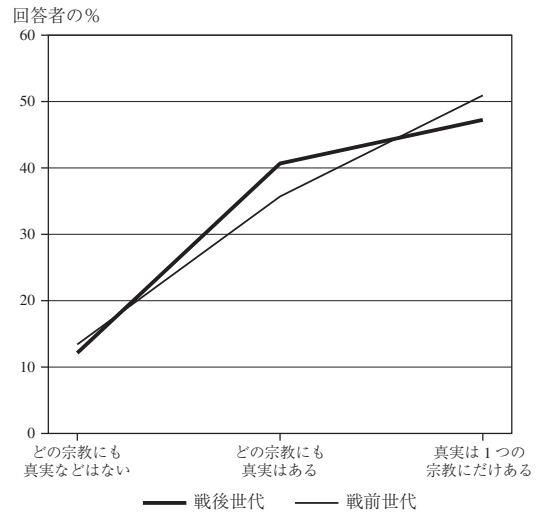


図 6j フィリピンにおける宗教についての考え方

以上から、スロバキアという例外的な国があるにしても、そして、「宗教的な寛容」の指標をめぐる方法論的な問題は残されているにしても、現在、ヨーロッパの多くの国ぐににおいては、「どの宗教にも真実がある」として、それぞれの宗教の価値を評価しようとする、いわゆる「宗教的な寛容」が広く浸透してきていることは間違いない。こうして、データは〈仮説 6〉を支持しているといえよう。

IV. おわりに——今後の課題——

本研究では、まず、これまでの欧米の宗教社会学における理論的研究から、「宗教意識の変容」をめぐる諸命題を抽出し、それらを7つの仮説にまとめた。

つぎに、「ヨーロッパ価値観調査 (EVS 1999)」「国際社会調査プログラム (ISSP 1998)」「宗教と道徳の多元主義調査 (RAMP 1999)」などの国際比較調査のデータ分析をとおして、これらの諸仮説をテストすることを試みた。

そして、その結果、これらの諸仮説は、データ

分析をとおして、かなりの程度まで確認できるものであることがわかった。つまり、ヨーロッパの国ぐににおいて、人びとの「宗教意識の変容」は、確実に進行しているといえるのである。

では、このような結果を踏まえて、今後の研究は、どのような方向に向かって展開されるであろうか。いうまでもなく、本研究の出発点における問題関心は、「宗教のゆくえを探る」というところにあった。そのような問題関心を、今回は、ヨーロッパの国ぐにに焦点を合わせて、実証的なデータ分析という形で掘り下げていった。このような線上で、今後の課題としては、すでに今回のデータ分析でも「日本」と「フィリピン」を試験的に取りあげたように、「ヨーロッパの国ぐに」と「アジアの国ぐに」との国際比較という試みが、きわめて興味深い研究となってくるであろう。

参考文献

- Arts, W. & L. Halman. (Eds.) (2004). *European values at the turn of the millennium*. Leiden : Brill.
- Beckford, J. A. (2000). Start and finish together. Shift in the premises and paradigms underlying the scientific study of religion. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 39, 481-496.
- Bellah, R. N. et al. (1985). *Habits of the heart*. Berkeley : University of California Press.
- Bellah, R. N. (1970). *Beyond belief. Essays on religion in a post-traditional world*. New York : Harper Row.
- Berger, P. L. (1967). *The sacred canopy*. Garden City, NY : Doubleday.
- Berger, P. L. (2001). Reflections on the sociology of religion today. *Sociology of Religion*, 62, 443-454.
- Brown, C. G. (1992). A revisionist approach to religious change. In S. Bruce (Ed.), *Religion and modernization. Sociologists and historians debate the secularization thesis* (pp.31-58). Oxford : Clarendon Press.
- Bruce, S. (1999). *Choice and religion. A critique of rational choice theory*. Oxford etc. : Oxford University Press.
- Casanova, J. (2001). Religion, the new millennium, and globalization. *Sociology of Religion*, 62, 415-441.
- Davie, G. (2000). *Religion in modern Europe*. Oxford : Oxford University Press.
- Davie, G. (2002). *Europe. The exceptional case*. London : Darton, Longman and Todd Ltd.
- Dobbelaere, K. (1981). *Secularization*, London : Sage.
- Dobbelaere, K. (1995). Religion in Europe and North America. In R. de Moor (Ed.), *Values in Western societies* (pp.1-29). Tilburg : Tilburg University Press.
- Dobbelaere, K. (2002). *Secularization. An analysis at three levels*. Bern etc. : Publishing Group Peter Lang.
- Draulans, V. & L. Halman (2003). Religious and moral pluralism in contemporary Europe. In W. Arts, J. Hagenaars & L. Halman (Eds.), *The cultural diversity of European unity. Findings, explanations and reflections from the European Values Study* (pp.371-400). Leiden & Boston : Brill.
- Finke, R. & R. Stark (1988). Religious economies and sacred canopies. Religious mobilization in American cities. *American Sociological Review*, 53, 41-49.
- Finke, R. (1992). An unsecular American. In S. Bruce (Ed.), *Religion and modernization. Sociologists and historians debate the secularization thesis* (pp.145-169). Oxford : Clarendon Press.
- Gellner, E. (1992). *Postmodernism, reason and religion*. London : Routledge.
- Haller, M. (1990). The challenge for comparative sociology in the transformation of Europe. *International Sociology*, 5, 183-204.
- Halman, L. & V. Draulans (2004). Religious beliefs and practices in contemporary Europe. In W. Arts & L. Halman (Eds.), *European values at the turn off the millennium* (pp.283-316). Leiden & Boston : Brill.
- Halman, L. & R. de Moor (1993). Religion, churches and moral values. In P. Ester et al. (Eds.), *The individualizing society. Value change in Europe and North America* (pp.37-65). Tilburg : Tilburg University Press.
- Halman, L. & O. Riis (Eds.) (2003). *Religion in secularizing society. The European's religion at the end of the 20th century*. Leiden : Brill.
- Inglehart, R. (1997). *Modernization and postmodernization. Cultural, economic, and political change in 43 societies*. Princeton : Princeton University Press.
- Jagodzinski, W. & K. Dobbelaere (1995). Secularization and church religiosity. In J. W. van Deth & E. Scarborough (Eds.), *The impact of values* (pp.76-119). Oxford : Oxford University Press.
- Jagodzinski, W. (2003). Religious and ethnical pluralism. Theoretical discussions and empirical findings. *Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal*, 93, 23-38.

- Jagodzinski, W. (2006). Comparative survey research and its infrastructure in Europe. *Kwansei Gakuin University School of Sociology Journal*, 101, 1–13.
- Lawrence, B. B. (1998). From fundamentalism to fundamentalisms. A. religious ideology in multiple forms. In P. Heelas (Ed.), *Religion, modernity and postmodernity* (pp.88–101).
- Luckmann, T. (1967). *The invisible religion*. New York : Macmillan. (= 1976, 赤池憲昭・J. スインゲドール『見えない宗教』ヨルダン社.)
- Lykken, D. (1968). Statistical significance in psychological research. *Psychological Bulletin*, 70, 151–159.
- Martin, D. A. (1978). *A general theory of secularization*. Oxford : Blackwell.
- Norris, P. & R. Inglehart (2004). *Sacred and secular. Religion and politics worldwide*. Cambridge, MA : Cambridge University Press.
- Pettersson, T. & E. M. Hamberg (1997). Denominational pluralism and church membership in contemporary Sweden. A longitudinal study of the period 1974–1995. *Journal of Empirical Theology*, 10, 61–78.
- Robbins, T. (1988). The transformative impact of the study of new religions on the sociology of religion. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 27, 12–31.
- Roof, W. C. (1985). The study of social change in religion. In Ph. E. Hammond (Ed.), *The sacred in a secular age. Toward revision in the scientific study of religion* (pp.75–89). Berkley : University of California Press.
- Rothstein, M. (Ed.) (2001). *New age religion and globalization*. Aarhus : Aarhus University Press.
- Stark, R. (1999). Secularization R. I. P. *Sociology of Religion*, 60, 249–270.
- Stark, R. & L. R. Iannacone (1994). A supply-side reinterpretation of the “secularization” of Europe. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 33, 230–252.
- Wallis, R. & S. Bruce (1992). Secularization. The orthodox model. In S. Bruce (Ed.), *Religion and modernization. Sociologists and historians debate the secularization thesis* (pp.8–30). Oxford : Clarendon Press.
- Warner, R. S. (1993). Work in progress toward a new paradigm for the sociological study of religion in the United States. *American Journal of Sociology*, 98, 1044–1093.
- Wilson, B. R. (1982). *Religion in sociological perspective*. Oxford : Oxford University Press.
- Wilson, B. (1998). The secularization thesis. Criticisms and rebuttals. In R. Laermans, B. Wilson & J. Billiet (Eds.), *Secularization and social integration* (pp.45–65). Leuven : Leuven University Press.

Religious Change in Western Europe: Theoretical Hypotheses and Empirical Findings

ABSTRACT

Most sociologists in Western Europe believe that contemporary societies are largely secularized, and that religion is gradually withering away. It has been argued that European religious belief systems have undergone a profound process of transformation. This process is not simple, and the pattern and speed of these changes vary. Some dimensions have already changed long ago, resulting in largely homogeneous attitudes and beliefs. Other changes are more recent, in one or two directions. Consequently, in some cases the society become sometimes more pluralistic, and in other cases, less.

The dimensions of change and the change hypotheses are outlined in Part II.

In Part III, these hypotheses are tested against empirical data. For this purpose, three comparative data sets are used: 1. the European Values Study 1999 (EVS 1999), 2. the International Social Survey Programme 1998 (ISSP 1998), and 3. Religious and Moral Pluralism 1999 (RAMP 1999).

The results of data analyses show that religious belief systems undergo a far-reaching transformation in the process of modernization. Our data analysis has focused on the changes in Western societies, and documented generational and social differences in various areas.

Key Words: religious consciousness, change, cross-national comparative survey, religious symbols, interpretation of dogma, reincarnation, spirituality